

太田〈おおだ〉の白鹿〈しろしか〉神社（山南町）

第百十四代桜町天皇の延享〈えんきょう〉三年（一七四六年）、春もたけなわ、きれいなつつじ咲く太田の山をふみわけて、谷川沿いに下ってきた一頭の白い鹿がいました。

全身は雪のようなまっ白い毛におおわれ、美しいというよりは神々〈こうごう〉しいばかりで、三つにわかれたいかめしい二つの角を重そうに前にかたむけて、苦しそうに、全身をふるわせながら、大きな息〈いき〉をついていました。

すらりとのびた前脚〈まえあし〉の右またのあたりに傷〈きず〉をしており、こんこんと血しおが流れ、片脚〈かたあし〉をまっ赤に染〈そ〉めて、一步、一步、よろめきながら、近づいてきました。

白い鹿はかなしげに、長い首をあげて、夕日のかがやく山をじっとながめていました。

誰がみつけたのか、不思議な白い鹿が出てきたので、村中大さわぎとなりました。「やあい、まっ白い大きな鹿がああの上で立っているぞ。」と口々〈くちぐち〉にさけびながら、遠まきによせてきました。

白毛と、りっぱな角が金色の光の中に浮んで、絵のように美しいすがたで岩の上につき立っていました。白鹿は、よせてくる人びとを首を左右にふって、ながめていました。

けたたましく、ほえる犬のなき声につづいて、ドットあがった里の人びとの声におどろいた鹿は、向うの川土手に身をおどらせたが、脚の傷のために、岸までとぶことができず水煙〈みずけむり〉をあげて、流れに落ちてしまいました。やがて白鹿は、引き上げられましたが冷たくなり、大きな目をみひらいて、死んでいました。その姿は、さきに岩の上で立っていた時よりも、いっそう神々しさがまして、誰がいうともなく、

「ああ！これは神様だ。」「村のまもりだ。」と口々にさけびました。

人びとは傷口をていねいにぬぐい、塚をつくってねんごろに、まつりました。

このことが、時の柏原藩主織田公〈はんしゅおだこう〉の耳にはいりました。

織田公は、「白鹿が出たことは大へんめずらしいことだ、何かのめでたいしるしだ、ねんごろに神としてまつれ。」との、ことばがありました。そして、おそなへものをたまわりました。

太田部落の氏神さまの境内〈けいだい〉に、社を建〈たて〉て白鹿神社として祭られました。その後、現在〈げんざい〉の場所に移されたといわれています。

脚痛〈あしいた〉をなおして下さる神様、また建脚〈けんきゃく〉の神様として、よくしられており、毎年春の大祭は、にぎやかに行なわれています。

